

この十句では、「盛夏から初秋」の時候を基軸に、「太宰府謫居の今の心象風景」を詠う。具体的には仏教の世界を希求することにより己の煩惱を排除しようと試みる。そこには太宰の地の夜空に浮かぶ月と蓮の花の開花の情景に触発されているのであると思う。

- |     |       |            |
|-----|-------|------------|
| 121 | 厭離今罪網 | 厭離今の罪網     |
| 122 | 恭敬古眞筌 | 恭敬す古の眞筌    |
| 123 | 皎潔空觀月 | 皎潔たり空觀の月   |
| 124 | 開敷妙法蓮 | 開敷す妙法の蓮    |
| 125 | 誓弘無誑語 | 誓弘して誑語無く   |
| 126 | 福厚不唐捐 | 福厚くして唐捐せず  |
| 127 | 熱惱煩纒滅 | 熱惱の煩い纒に滅し  |
| 128 | 涼氣序罔愆 | 涼氣の序愆つこと罔し |
| 129 | 灰飛推律候 | 灰飛びて律候を推す  |
| 130 | 斗建指星躔 | 斗建して星躔を指す  |

【十四段】

この十句では、「酷暑が去り、仲秋を迎えた時候の心象風景」を詠う。百三十八句で「九見桂華圓」と詠むように、陰曆九月、仲秋の名月を鑑賞する時候を迎えたのである。こうした本格的秋の気配、秋の事物に触れるにつけ、今の自分自身の置かれている事態の悲惨さ、そしてその事態の打破には、京に戻るしかないのに、それが